

分科会報告 H分科会

●テーマ：集まって住む

- 司会：濱田剛子 (熊本県建築士会、(株)中村建設)
- アシスタント：荒木由美 (長崎県建築士会) ●出席者：50名



主旨

プライバシーを重要視される中で育ち、他者とのコミュニケーションが不得意な人が多くなった。コミュニティの大切さが見直されているが、超高齢社会、孤独な子育て世代、貧困、大量のストック建築物、等々、多くの問題を抱え、私たち建築士も建物と人にとどのように向き合っていくか試行錯誤している。

“集まって住む”という住まいも、住まい方も同様に変節の時期に来ている。今回の分科会は、ユニークな“集まって住む”かたちを実現された「ラティス芝浦」と「大森ロッヂ」を紹介していただき、4グループでの意見交換を行った。



●ラティス芝浦 (撮影：エスエス東京)



●大森ロッヂ

事例発表1 「ラティス芝浦」

コメンテーター：笠井香澄
(東京建築士会、竹中工務店)

「ラティス芝浦」は、築20年のオフィスビルを賃貸住宅・SOHOにコンバージョン(用途変更)した建物である。「既存の建物を大切に、永く使う」という地球環境に配慮した建築のあり方にとどまらず、既存建物や周辺環境が蓄積しているものを読み込み、ライフスタイルの提案にまで踏み込んでデザインを展開した事例。

事例発表2 「大森ロッヂ」

コメンテーター：天野美紀 ((株)atelier E03)

「大森ロッヂ」は、昭和30～40年代に建てられた木造長屋群をリノベーションして、新しい命を吹き込んだ“街角再生プロジェクト”。

建物を繋ぐ路地や住人のくつろぎの場となっている東屋、イベントを行う広場や共有ギャラリーなどを備え、建築というハード面、運営管理というソフト面の両面から、向こう三軒両隣のご近所付き合いが生まれるような仕掛けを施している。

既存の建物の佇まいや歴史を重ねた空気感をなるべく残しつつ、当たり前の耐震性と快適性は求めていく。ヒト・モノ・マのゆるやかなつながりを体現できる、昭和の長屋の街区再生。

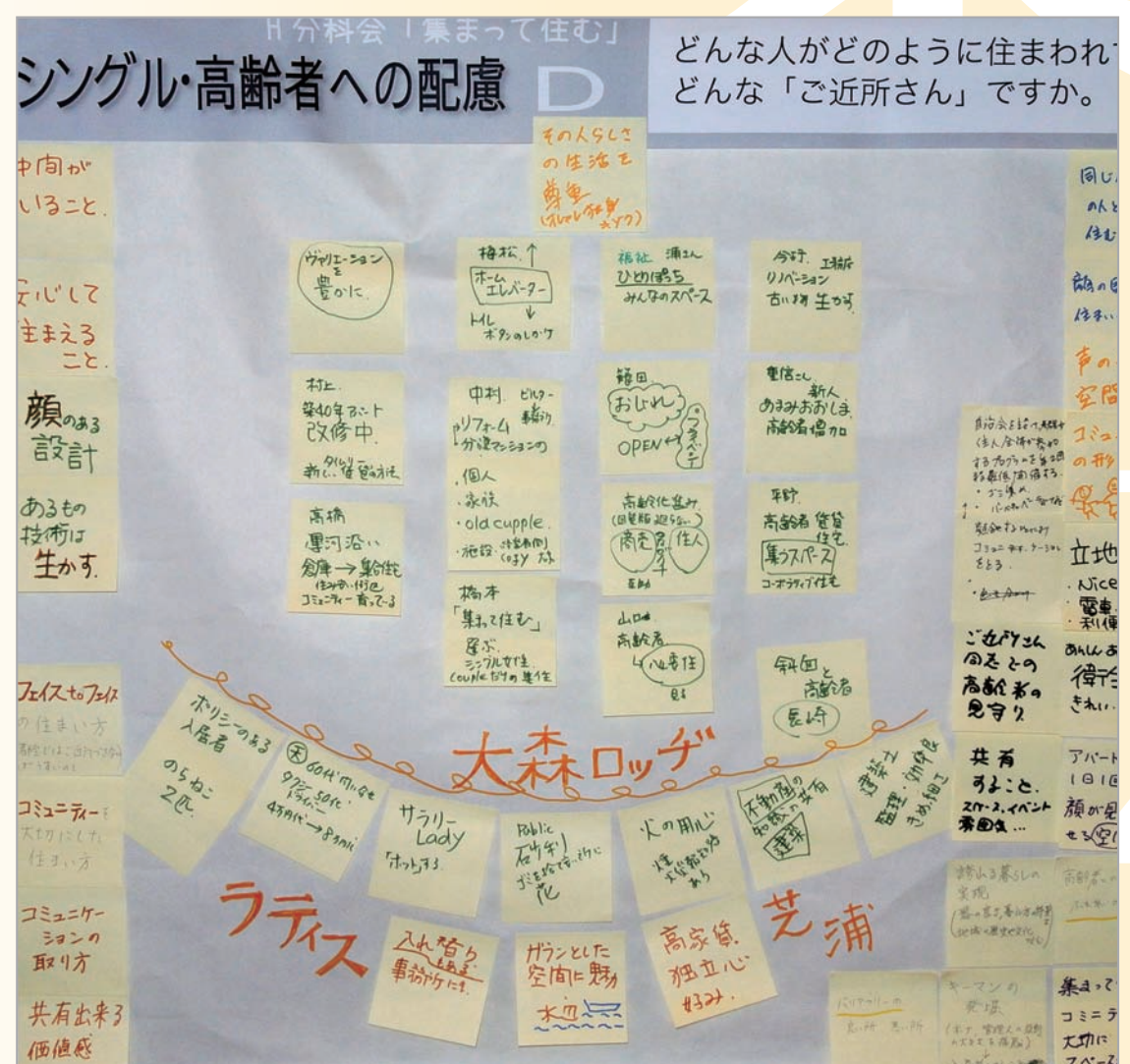


●H分科会の様子

まとめ

参加者50人は4グループに分かれ、近い距離で意見交換会に参加。「建物への配慮」「コミュニティの形成」「ストック建築物、町並みの活用」「シングル・高齢者への配慮」をテーマにコメンテーターも各グループ討議に加わった。

今回の舞台は東京の湾岸エリアで水辺への眺望が楽しめるSOHOやガレージハウスでの暮らし、片やレトロな長屋群での路地裏コミュニティのある生活、この集まって住む手法にそれぞれの思いを馳せながらも、自分たちの地域特性に活かすヒントを持ち帰った分科会となった。



●H分科会の成果物